



平兵士は過去を夢見る 1

ALPHAPOLIS

丘野 優
Yu Okano

ALPHAPOLIS 文庫 

タロス村の三馬鹿

テッドの子分の中でも特別やんちゃな三人。

オーツ

フィル

村一番の物知りで、ニヒルな性格の少年。

ヘイス

コウ

テッド

ジョンの幼馴染。
村の子供たちをまとめる、ガキ大将的存在。

カレン

おとななじみ
ジョンの幼馴染の勝気な少女。
村の男の子に一番モテる。

アレン・セリアス

ジョンの父親。
「魔の森」の守護兵士たる、
屈強な剣士。

ファレーナ

人間離れた雰囲気のある妖しい美少女。
前世にて、ある事件で死に直面したジョンに力を貸す。

ユスタ

巨大な狼のような魔物、クリスタルウルフの一体。ジョンが生まれ育ったタロス村近くの森に棲む。

ジョン・セリアス

本作の主人公。勇者が魔王を討伐した直後に死亡、なぜか赤ん坊から人生をやり直すことに。



プロローグ

——ああ、これで世界が救われるんだなあつて。
そう思った瞬間だ。

俺達の勇者が、憎き魔王を倒した直後——自分の胸から銀色の鋭い金属の塊かたまりが伸びて
いるのを見た。

「……え？」

驚いて、そんな言葉しか出なかった。

え？　なんて。

もっと気の利いた台詞せりふが出てくるもんなんじゃないのかな、こういう時つてさ。

神様にしたって、こういう時くらい、蟲むし貞まことしてかっこいい台詞を言わせてくれてもいい
んじゃないか。

でもな。分かつてる。仕方ないんだよ。

あつけないものなんだ。

とんでもなく、あつけないものなんだ。
何年も続いた魔族との戦争。

沢山の知り合いが命を落としていった。中には、親友だっていたし、プロポーズした相手もいた。

でもある日、英雄が伝説の武器を持って俺達の国に現れた。
まるで物語の中みたいだって、そう思ったんだ。

とてつもなく、明るい時代が来るんじゃないかと、浮かれた。俺達は、絶対に勝つて、心の底から信じてしまっただけ。

勇者、聖女、大魔導、精霊王。

夢見たっておかしくない面子だろ？

そりゃあ、期待したさ。

だけど現実残酷なもんでさ。

彼らがいたって、兵士は死ぬんだ。

メルロも、ヒルテイスも、ケルケイロも、もう帰ってこない。

帰ってこないんだ。

俺だけがみつともなく生き残って、最後の最後までついていった。

復讐心だけ引っさげて、血反吐、吐くくらい頑張っついていったんだ。

そうしたら、目の前で見られた。

勇者が、聖剣を手に、人類の悲願を達成するところを。

圧巻だったぜ。

輝いていたんだ。

勇者も、剣も、空気もさ。

だから思ったんだ。

——ああ、これで世界が救われるんだなあって。

だから、まさか思わなかったよ。

こんなところで敵の残党にぶっ刺されるなんてさ。

そんな訳で、俺、世界国家連合・魔王討伐軍一兵卒、ジョン・セリアスは、すっきり

さっぱり、死にましたとさ。

はは。笑えないな。



長い夢を見ていたような気がした。

空は暗く、世界は闇に包まれ、人は死に、魔が闊歩する。

そんな時代の、悲しい夢を。
でも。

「ばちり、と目を開いたその時、俺にははっきりとそれが夢じゃなかったんだって分かった。」

「あれは、確かに存在したことだ。事実だ。」

「まるで夢にしか思えない、夢としか思いたくない、苦しくてつらい記憶なのだとしても、確かにあったことなんだ。」

「だって、俺ははっきりと覚えてる。」

「自分の命の消える瞬間を。」

「死んでいった戦友達の、最期の表情を。」

「それに、そうじゃないと、俺は顔向けできない。」

「戦って死んでいった仲間達に。」

「命を懸けて人類を守った人々に。」

「そして、弱いくせにどこまでも死ぬ気で頑張った自分自身にも。」

「そう。」

「あれは、あったこと。」

「確かに存在したこと。」

俺はあの伝説の英雄達に率いられ、魔王城に突入し、勇者が魔王を倒すところを目撃し、そしてその残党にすつきりさつぱり殺されたんだ。

「だから、目の前にある光景は、よく分からない、不思議なものだ。」

「——どうして魔王軍に破壊されたはずの俺の家が、今もまだ存在している？」

第1話 まるで夢のような

あれから何日かが経った。

「——ジョン？ どうしたの？ おかしな顔して……」

不思議そうに、寝転がる俺を見下ろす女性。

この人は、あの戦争が始まって以来見たこともないくらい穏やかに微笑んでいるこの人は、俺の母親だ。俺が物心ついた頃にはすでにかんりの重量級の体型になっていた母さんだったが、それよりも少し前までは本当に線の細い御嬢さんだったらしい。

——若い頃は綺麗だったのよ！

なんて、まるまる太った本人から何度か聞いたけど、まあ昔話を盛るくらいは別にいいだろうと聞き流していた。

元々、王都で手広くやってる豪商の末娘だったと聞いたことがあったから、ある意味納得ではあるのだが、それにしてもこれがあんなてしまふのかと想像すると、ため息が出る。

「……？ 今度はまた随分と厭世的な顔ね……？ まあいいか。ほら、ご飯の時間よ」

そう言っって、彼女は着ている服の胸元をはだけさせていく。

なぜそれがご飯なのかだつて？

そりゃあ、もちろん。

「……ばぶう……」

俺が赤ん坊だからだよ。



そのことに気付いたのは、目が覚めて、しばらくしてからだった。

自分の体の不自由さ——なぜか動かない首、いまいち力の入らない手足——は、刺された傷によって何らかの後遺症が残ったせいだ、と思っていた。

目だけをぎよるぎよると動かせば、忙しなく動いている人が見えた。

だからきつとここは病院かどこかで、俺は患者なのだろうと、そう考えた。

戦争の末期になると、物資も人員も欠ける上、患者の看病などしている暇もないような極限状況だったから、重傷を負った者のほとんどはその場で薬にもらっていた。一兵卒に過ぎない身であれば尚更だ。

だから刺された時に、俺の運命もほとんど決まったものだと思っていたのだが、よくよ

く考えてみれば、魔王が勇者によって倒されたのなら、そんな対応を取る必要もなくなる。それに、現実問題として、人間は数を減らしすぎていた。年頃の男はほとんどが徴兵されたし、余程の強運の持ち主でなければ、その先には死が待っていた。戦争が始まって以来、人口は減少するばかりであり、人類はジリ貧だったのだ。

だからこそ、もし戦争に勝利したのなら、少しでも多くの人間を生かしておきたいはずだ。俺のような死にかけの一兵卒であっても死なせる訳にはいかないだろう。

魔王の城に向かうにあたり、俺達世界国家連合・魔王討伐軍は、一兵卒に至るまで全員が高価な武器や薬劑を大量に持っていた。

なにせ、総力戦の最後の一手だ。物資も兵力も状況も何もかもが、この戦いで敗北すれば人類は終焉を迎えるということを物語っていた。たとえ伝説級のアイテムであったとしても今さらけりけりして負けてしまつては、結局無駄になるのである。ならば使つてしまえ、ということだった。まあ、限界に近かつたのは魔族も同様だったが。

怪我を負つた俺にも、そういう薬劑が投与されたのだと思つた。三級ボーションなんて、平時であれば金貨何枚で買えるんだという高級品も、信じられないくらい量の量が集められていたし。もう魔族との戦なんてないのだと考えれば、一兵卒である俺に対して使つてくれることもあるのかもしれない。

だから、これは全然おかしくないことで、数日もすれば起き上がれるだろう――

けれど、この考えが間違つていたことを、俺はすぐに知ることとなった。

それは俺のもとにやつてきた若い娘が「ご飯よ」と言つた瞬間であり、軽々と自分の体を持ち上げられたその瞬間であつた。

俺の体はこれほどまでに軽かつたか？

そんな疑問が発生すると同時に、色々なことが気になり始めた。

目の前の娘は、誰かに似ていないだろうか。たとえばそう、いつも鏡を見ると目に入る――俺になんとなく似てないだろうか。目元など、そっくりではないか。

いや、そもそも、だいぶふつくらさせれば、俺の母さんに似ているような……？

というか、今俺がいるこの部屋。見覚えがあるんじゃないか？
病院、という感じでもないし、先ほどちらつと目に入った絵は実家に飾られていたものに似ているし。

そこまで考えても、まだ状況を把握するには至らなかつた。

目の前にいる娘は確かに母さんにも俺にも似ているものの、いかんせん若すぎるし、部屋も実家に似てはいるが、俺がつけたはずの傷が見当たらない。だから、似ているけどやっぱり違うのだろうと、現実逃避にも似た気持ちで否定していた。

だけ。

直後、どたどたという音と共に、誰かが部屋に近づいてくる気配を感じた。足音の感じからしてたぶん、男だろう。

そうして部屋の前まで来ると、そいつはドアを開けて入ってきた。

一体誰が来たのかと、俺は部屋の入口の方へと視線を向けた。

そして、その瞬間、俺は悟った。

ここは——ああ、ここは、まごうことなき、俺の家なのだ。

「おお、その子がジョンか！ エミリー、俺にも抱かせてくれ！」

そんなことを言った男の視線は俺に固定されており、なるほど「ジョン」とは、はつきり俺のことを指しているのだと理解できた。

そして男の顔にも、見覚えがあった。

懐かしい、その顔。

それは、戦争の初期に戦死したはずの俺の父親——アレン・セリアスに他ならなかった。

「あら、アレン。随分早く帰ってきたのね」

母さんが、親父にそう言っただけ。

失われた景色。幸せな、もう戻ってこないはずだったそれ。

俺は涙を抑えられなかった。

「……うえーん」

「お、おい！ 俺の顔を見て泣いたぞー！」

「あなたの顔、怖いから……熊みたいだものね」

「そんな！ 俺は父親だぞー！」

「父親でも熊は熊よ。怖いわ」

「お前まで……」

「ふふ。ほら、ジョン。泣かないで。お父様よ」

「そうだ！ お前が生まれたっていうから、休暇を貰って帰ってきたんだぞ！ 泣かないで笑ってくれ」

二人は楽しそうに、幸せそうに俺をあやしている。

そんなことをされればされるほど、涙が止まらなくなってくるのだが……これはもう仕方のないことだろう。

失われた景色が、今ここにある。

どんな奇跡もかすむような事実が、俺の前に。

ふと、俺は自分の手を見てみた。

まるっこい手だ。ただひたすらに剣を振り、血豆をつくっては潰してきたあの硬い手ではない。ふわふわのマシユマロのような手がそこにはあった。

母さんが俺を撫で、それに続いて親父もガラス細工を扱うように触れてくる。

家族の感触がした。

母さんの手はさらさらと優しく、親父の手はかつての俺の手のようにごつごつと硬い。国境に近い「魔の森」を守護する砦の守り人として、人生の大半を過ごした親父。

勤勉で、剣の腕も飛び抜けていて、人望もある。そういう人だった。

だから俺はその後を追おうと、兵士になった。

俺は、この人に追いつけたのだろうか。

この人に誇れる人間になれたのだろうか。

「……ばぶ……」

そんな気持ち声をしようとしても、言葉にならない声しか出ない。

仕方があるまい。そうだ。俺は……今はまだ喋れない。そういう年頃なのだろうか。

第2話 平和な日常と、村での俺、そして少しの過去と

生まれてから五年が過ぎた。

歩けるようになって、改めて見物してみると、俺の村は、俺の故郷は美しかった。

どこにでもある平凡な村だと言われればそれまでだが、あの悲惨な時代を生きてきた俺

には、それこそが何物にも代えがたい大切なものだと分かっている。

森を切り開いて作られた小さな村。

近くの丘の上に広がる牧草地には羊が走り、それを牧童が犬を連れて追いかけている。

遠くには黄金の穂を垂れる稲が揺れ、柔らかな風が村を駆け抜けていく。

永遠とも思えるくらい、長く続いたあの戦争の中で、こういった風景はほとんどが失われた。

人が長い歴史の中で、試行錯誤を経て作り上げてきた営みは荒野へと姿を変え、妖精やエルフの住まう神聖なる森は、魔物が跋扈する「瘴森」へと置き換えられていった。

だから、今、目の前に広がるこの風景は、俺にとって奇跡のようなものだ。

感慨深い気持ちで、故郷を歩く。もう会えなくなっただけの人達の顔を見ながら、もう一度やり直すチャンスが与えられたことを神に感謝した。あの戦争の前なら、神など信じ以前に存在すら頭に上らなかつたであろうが、戦争を通して浄化と回復の魔法を得意とする司教達と深く長い交流を持っておかげで、信仰心のようなものも生まれた。

司教達が言うには、神を深く信仰することで浄化と回復の魔法が使用可能になるらしい。前世の俺は、いくら頑張っても使うことができなかった。それは元々、俺には信仰心が皆無だったからかもしれない。だが、この大陸で一番信仰されている太陽神ウェンドースを

奉^{ほう}じるウエンドース聖教会の信徒でも、全員が使えるという訳ではない。むしろ高位の司教のみが使用できるに過ぎなかった。つまり、必ずしも信仰心だけが条件ではなかったのだ。

あの戦争の末期、浄化・回復魔法は軍の中でも大変に重要で、使い手を増やすことは常に急務であった。人類が滅びに瀕^{ひん}した状況では、教会も自分達だけの秘匿^{ひとく}技術にしておく訳にもいかない。魔法に関する情報^{おほけ}を公にしたうえで、人類は一丸となって使い手の育成を行った。

けれど教会も使用可能となる条件の全てを把握していた訳ではなく、あくまでこうすると使えるようになる可能性が高い、という経験則があるのみだった。それゆえ、使い手は数倍に増加したものの、軍全体が使えるようになるまでには至らなかった。

ただ、そうやって極めて大規模で組織的な育成を実践していくにつれ、育成方法が洗練されていったのも事実である。

その中で明らかになったことの一つに、十五歳未満の人間は覚醒^{かくせい}率が非常に高い、というものがあつた。特に、親が信心深かつた者は九割近い確率で成功しており、できるだけ幼少期から欠かすことなく神に祈りを捧げ続けることが、重要な条件であるとわかつたのだ。

とはいえ、大人になってからでも浄化・回復魔法が使えるようになる者はいるし、全く

信仰心がなくとも目覚める者も一定数存在したことから、絶対条件とまでは言えなかつた。

ともかく、俺はこの現世で、未来のためにどうしても浄化と回復の魔法を使えるようになっておきたかつた。生まれ直してからこの方、毎日神に対する祈りを捧げており、その甲斐もあつてか、最近では少しずつ使えるようになっていた。

最近の俺は、日課として萎^{しお}れた植物や怪我をした小動物を見つけては、魔力の続く限り回復魔法の練習をしている。

一度、擦^こり傷を負つた自分に魔法をかけてみたが、一時間ほどで跡^{あと}も残らずに治つてしまった。今はまだ治癒^{ちゆ}にかかる時間を短縮させる程度にしか上達していないが、そのうちに昔見た司教達のように、一瞬で大怪我を治せるようになりたいものである。まあ、所詮^{しよせん}一般兵に過ぎなかつた俺には厳しい話かもしれないが。

今のところ、両親にも俺が魔法を使えることは秘密だ。学んでもいないはずのものが使えるというのは、いくらなんでも怪しすぎる。

「おや、アレンのせがれじゃないかい。今日も散歩かい？」

「うん。することないから」

村を歩いていると、たまに声をかけられる。とは言つても村人は皆、畑仕事をしていたり、縫^ぬい物や物を運んだりと忙しそうで、すぐに去つてしまうのだが。



あと数年も経てば、俺も村の労働力として、力や体力がそれほど必要でない、内職のような細々とした仕事に駆り出されるようになるだろう。

この村には俺と同じような年代の子供——三歳から十歳くらいの間で、まだ村での仕事が与えられていない子供——もそれなりにいるのだが、彼らとはあまり交流していない。別に俺が孤高を気取っているとかそういう訳ではなく、村のガキ大将的な存在にあまり好かれていないというのが原因である。

喧嘩をしたとか親同士の仲が悪いとかではない。ただなんとなく、子供の体に大人の精神が入り込んでしまっている俺のことを、向こうが奇妙に感じているようだ。なんと言うか、今では立派な子供社会における村八分である。

村のガキ大将というのはなぜか不思議と、それなりに器のどかい男がなる。俺の村でもその原則に従い、ガキ大将はよくも悪くも子供の元締め的存在だった。多少陰険な性格ではあったものの、前世では俺のことも遊びに誘ったり、危険な場所に入り込もうとしているところを諭してくれたりしたものだ。

大人になってから色々話してみると、やはり彼はガキ大将になるべくしてなったのだと理解できた。幼い頃のようなやんちゃさは影を潜め、迫力も幾分控えめになったが立ち位置は変わらずで、何かと頼られることが多かったのを覚えている。皆の性格を良く理解し、それぞれの間を取り持つのがうまかったのは、ガキ大将時代の経験が生きていたからだ

ろう。

過去に戻った今、俺はそんな優秀な奴とせひ仲良くなりたかったのだが、残念ながら彼の方から俺を避けるようになってしまった。彼の観察力が仲良くなるためのネックになってしまったのは、非常に皮肉なことだ。

けれど落ち込んでばかりもいけない。

友人を作ることも必要だが、魔族との大規模な戦争のために、俺はまず自分を鍛え上げなければならぬのだ。

最後の決戦まで生き残ったとはいえ、その直後にあっさり死んでしまうような俺ごときが多少努力して強くなったからと言って、何が変わるとも思えない。しかしそれでも、一人でも二人でも多くの命を救うことができるかもしれない。

それに、あの頃出会い、そして死んでいったたくさんの仲間には、俺はもう一度会いたい。友には共に死ぬことを誓い、恋人には死ぬまで守ることを約束したにもかかわらず、どちらも果たせなかつた無念は、はつきりと覚えていて。今回は絶対に後悔したくない。

今度こそ救うのだ。彼らを。

とはいえ、現状でできることなど限られている。成長して、森に堂々と入ることができるようになったら、森の魔物を狩って資金稼ぎでもしようと考えているのだが、今はひたすら魔法と剣術の訓練を重ね、家にある親父の百科事典を読んで知識を蓄積していくの

みだ。

親父は「魔の森」を守護する兵士として皆に勤務しており、ほとんど家に帰ってこない。たまに帰ってくると、俺を村の周りの森へ連れて行ってくれる。

親父はその見かけ通り鬼のように強く、五歳の子供を連れながら魔物のはびこる森を鼻歌交じりに歩き回れる、稀有な存在だ。

もちろん、森の浅いところにいる魔物は弱く、俺を連れて行ってくれるのもそれぐらいのところを過ぎないからであるが。

獵師でもないのにそんな風に森に連れて行ってくれるのは、俺が将来は兵士になりたいと言ったからだろう。今からそれに必要な度胸と心得を身につけさせてやろうと、つまりはそういう親心だ。

「俺に一撃入れられるようになったら、森に一人で入ることを許してやるぞー！」

親父は以前、そんなことを言っていた。まあ、酒を飲んでつい口走ったことだから、向こうはもう忘れているかもしれないが、俺はしっかり覚えている。

当たり前ながら、親父に一撃入れるというのは子供には到底不可能なことだ。おそらく俺がそれなりの年齢とそれなりの実力を備えたら、わざと一撃入れさせてくれるつもりなのだろう。そういう具体的な目標を示すことで、俺を成長させようとしてくれているのだ。

そんなところに親父の愛情を感じて、とても温かい気持ちになる。

けれど、俺は普通の子供ではないのだ。平兵士に過ぎなかったとはいえ、俺は前世で正統な剣術を学び、過酷な実戦でそれを磨き続けて生き残った実績がある。

お互いの力量を知ったうえで、真剣勝負ならともかく、所詮子供に過ぎないと俺を侮る親父に一撃入れるくらいなら、できない話ではない。

俺の一撃に呆然とする親父の様子が目に浮かぶようだ。驚かせてやるためにも、毎日の剣術と魔法の修業にはげもう。そう考えると、少し楽しくなってくる。

魔法といえば、この世界の兵士であれば「火種を起こす」とか「水を生み出す」といった生活魔法と言われる魔法はほぼ全員が使える。ただし、攻撃魔法となるとまた話は別となる。

攻撃魔法は生活魔法と比べて発動・維持に多量の魔力を消費する。しかし、攻撃魔法を使いこなせるほどの魔力を持つ者はあまり多くない。

数年に一度、それだけの魔力を持つ者がいないか、国が小さな村にまで出向いて調査しているくらいだ。そこで攻撃魔法の使用に耐える多量の魔力保持者であると明らかになると、その村の属する領地もしくは王都に存在する魔法学院から、入学通知が届く。

魔法学院は魔術師——この場合は攻撃魔法を使用できる者のこと——として必要な知

識・技術を専門的に教える公的な教育機関であり、多量の魔力保持者はここに入学することを強制される。

それは国が抱える魔術師の数が軍事力、ひいては国力に直結すると理解されているからだ。そのため通知が来た場合、入学を断ることは基本的にできず、将来は軍や騎士団、魔術師団へ所属することが決定事項になる。

だが入学が強制である以上、授業料は無料だし、平民が出世するための登竜門とも言われているから、入学通知が届くことはむしろ名誉であった。

前世において、俺は魔術師としての才能を認められられなかった。だから魔法学院に入学することもなく、王国兵士の採用試験を受けて一般兵として平兵士人生をスタートし、そして死ぬまで平兵士だった。今回はどうだろうか。

ちなみにこの時代——というか魔族との戦争がある程度の段階に至るまで、魔法にしる技術にしる派閥のようなものがいくつもあり、技術や知識はその内部で秘匿されている場合がほとんどだった。そのため研究は遅れ、魔力の多い少ないは生まれつきのものだとされてきたのだが、これは後に完全に否定されることとなる。成人するまでの期間に魔法を使うことにより、魔力量が徐々に上昇していくことが明らかになるからだ。

上昇率は人それぞれではあったが、幼少期から訓練を重ねれば、一般的な攻撃魔法を使えるくらいの魔力量に至ることが可能とわかったのだ。

そして魔力の上昇率は、年をとればとるほど徐々に低くなっていき、そして成人に至るとゼロになる。

実際俺の魔力量も、毎日植物に回復魔法をかけたたりしているだけだが、前世に比べてかなり多くなっている。今なら、攻撃魔法を使うことも問題なく可能だろう。いずれ練習を始めたところだが、村で火の玉を放ったりすればとてつもなく目立ってしまうから、森に入れるようになってからにしようと考えている。

こうして一心不乱に植物に回復魔法をかけ続けていると、いつの間にか日が落ちて、夕陽が辺りを朱色に照らしていた。

「そろそろ帰るか……」

ぼつりと呟く。今日もまた、友人はできず。

あわよくば同年代の友人ができないものかと、子供を見つけたら積極的に話しかけているのだが、やはり避けられている。

なぜだ。中身はともかく見た目は子供なのに……

とぼとぼと家路につく。

「おかえり、ジョン。夕飯できているわよ」

家に入ると、母さんが俺を迎えた。家の中には温かい空気と夕飯のいい匂いが満ちてお

り、一日中歩き回ってお腹が減りに減っていた俺の食欲を刺激する。

「ただいま。母さん。今日も友達はできなかったよ……」

「あら……そんな落ち込まないで。今日はたまたまよ、たまたま。きつと明日にはできるわ！ ジョンはいい子だもの」

母さんはそう言っただけ俺を慰める。だがしかし、この会話は結構前から毎日繰り返されているのだ。

息子のぼつち具合を毎日確認する羽目になっている母さんは、どういう気分だろうか。非常に申し訳ない気持ちでいっぱいである。

ちなみに今、家に親父はいないので、母さんはその細腕——まだ細腕なのだ——で、家の万事を取り仕切っている。意外にも力仕事も結構自分でやってしまうので、男手が無いこともそれほど問題にはなっていない。それに、男手がどうしても必要なら、村の男達に頼めば快く手伝ってくれる。ド田舎の村のいいところは、村人達がみな顔見知り、助け合って生きていることだろう。

母さんが食卓にてきぱきと皿を並べていく。その手料理の数々は、味もさることながら、栄養のバランスがよく品数も豊富だ。

親父が言うには、結婚した当初は壊滅的な腕前だったが、毎日書物を読み、村の女達から学びながら研究を重ね、母さんは料理の腕を上げていった。

今では村の郷土料理について誰より詳しく、また美味しく作れるのは母である。

村に来た租税徴収官などの重要人物に、村長宅で料理を振る舞う時に呼ばれるのも、村に一軒だけある宿の亭主と母さんだ。二人の合作はそれは美味しく、見た目も美しいため、租税徴収官は満足して帰っていくらしい。それで税金を安くしてくれるということはないが。

「そういえばね」

食事を取りながら、母さんが嬉しそうに話す。どうやらいい知らせがあるらしいということは、声を聞くだけで分かる。

「うん。なに？」

「アレン——お父さんから、休みがとれたから帰ってくるって手紙が来たわ」

「本当!？」

思わず食卓に手をつけて立ち上がる。

親父が、帰ってくる。それは様々な意味で喜ばしい知らせだった。

前回帰ってきたのは、半年ほど前だった。久しぶりに会う親父。前世でも総合してほんの数カ月程度しか家にはいなかった。

その親父が、帰ってくるのだ。嬉しくない訳がない。

それに、今回は俺が森へ単独で出入りできる許可を得られるかどうかがかかっているか

ら、なおのこと期待も高まる。攻撃魔法の訓練をできるだけ早く始めておきたいから、人目の少ない森への外出許可はなるべく早く欲しい。

「手紙は今日届いたんだけど、出したのは五日前の日付になっているわ。六日くらいで着くだろうって書いてあるから、帰ってくるのはきつと明日ね」

母さんは本当に嬉しそうである。そりゃあ、愛する夫が帰ってくるのだから嬉しいだろう。そのことに不思議はない。ただ、食事のスピードが上がっているように思えるのは気のせいだろうか。

いつもはあまりお代わりをしない母さんが、もう三度ほどしている。嬉しいと、食欲も増すんだろうか。ふと、キッチンの方に目をやれば、明らかにいつもより多い料理が見えた。まさかあれ全部食べる気か。

怪訝けげんそうな目を向ける俺に、母さんは言う。

「明日は、アレンがあなたを森に連れて行くと思うわ。今日はいっぱいご飯を食べておきなさい。明日の朝もね」

なるほど、そういうことか。

確かに親父は、家に帰ってくるはず俺と一緒に森に出かける。そこで獲物を仕留めて村への土産みやげにするのが、親父が帰ってきた際の定番だった。

村全体への土産にできるほどの大きさのものを仕留めるのである。親父は猟師ではない

から、通常の動物を効率よく捕らえるのは得意ではない。そんな親父が狙うものと言ったら、一つしかない。

「久しぶりに魔物が夕飯に並ぶのね……楽しみだわ」

母さんが機嫌よさそうに言った。

そう。親父が仕留める獲物。それは魔物に他ならない。

魔物は通常の動物とは異なる生体で、また強力さにおいてもその比ではない。彼らは魔力を使用することができるからだ。使用方法は魔物によって千差万別で、無意識的に身体強化するものもあれば、人間のように攻撃魔法を発動させるものもある。普通の人間では太刀打ちすることが難しいため、村の獵師も魔物にはおいそれと手を出さない。

ただ、魔物をあまり放っておくと通常動物を駆逐してしまう場合があるので、うちの村のように森を切り開いて作られた村では、定期的に魔物を駆除することが必要だ。

普通なら、それ専門の冒険者協会や騎士団などに金銭を支払って対処するのだが、うちの村には親父がいる。半年に一度帰ってくる親父が村にいる間の仕事は、森の浅いところにいる魔物の駆除なのだ。

まず初日に魔物がどの程度増えているか、どの程度森の生き物に影響を与えているかを調べ、それから計画的に狩っていく。

狩った魔物は村に定期的に戻ってくる行商人に売却し、それによって得られた金銭の半

額が村の収入になり、半分が我が家へと入る。親父には兵士としての俸給もあるから、この村において我が家はそれなりに小金持ちだ。

ただ、母さんの方針で贅沢してないため、家は普通の民家だし、衣食も村の平均レベルを出ない。極端に贅沢をして村人達の矚目を買うよりはよほど賢いだろう。

それに、なぜ無駄遣いをしないのか、実は俺は知っている。

前世において、俺が訓練期間を終えて晴れて一般兵になった時、母さんと親父は貯めたお金で俺に高価な武器を贈ってくれたのだ。見た目は通常の武器にしか見えないものだったが、実のところそれはかなり上質なもので、それこそ死ぬ直前まで使用し続けた。

その品質の高さを知ったのは、武器を貰って、だいぶ経ってからのことだった。

数年間兵士をやってそれなりに評価された結果、天狗になりかけて、もったいいい武器が欲しいと、工房を訪ねた。

もちろん、両親から貰った武器を売ったり処分したりする気はなく、もう使わないにしても、記念品として持つておくつもりだった。ただ、自分は昔より強くなったのだから、いい武器が欲しいという、それだけだった。

すると、その工房の中で最も偉そうで貫禄に満ちた眼光鋭い親父が、俺のところに来てこう言った。

「お前が身につけているものよりいい武器は、今ここにはねえ。それにもし本当に欲しい

なら白金貨が必要になるが、お前にそれが払えるのか」

白金貨と言えば、一枚で王都に家が建つようなとんでもない価値の貨幣であり、当然平兵士に過ぎない俺にそんなものを出せる訳がない。そして、俺の持っている武器は、それに匹敵する価値を持っていると親方が言ったのだ。

驚いた俺が、これはそんなにいいものなのかと尋ねると、親方は納得したような顔で深く頷いた。

「確かに見た目は普通だからな。そんなにいいものに見えねえのも分かる……両親に買った？　ははあ……いい親じゃねえか。ぱつと見じゃ分らないだろうがこいつはな、剣も鎧も、ミスリル銀と銀竜の鱗うろこを特殊な方法で合わせた素材を、おそらくは年単位で鍛えたものだ。その割に普通の鉄の武器にしか見えねえのは、作った奴のポリシーなんだろうよ。実用品の武器に余計な装飾はいらねえってか。良くも悪くも頑固な奴がこが作ったんだろうが……それがお前の両親からそういう風に作れと言われたのかもな。ともかく、これはいい武器だ。一生もんだ。大切に扱えよ」

久しぶりにいい武器を見た満足そうに笑う親方を、周りにいた弟子達は絶句して見めていた。たぶん、普段はあまり笑わない人なのだろう。職人らしい。

色々なことを教えてもらい、感謝の言葉を何度も言いながら店を出ようとする俺に、親方はこう言った。

「その剣も防具も、傷んだら俺のところにもってこい。砥とぎぎも直しも格安で引き受けてやる。なに、いいものを見せてもらった礼だ」

そしてまた口の端はしを上げて笑ったのだった。

この後に、なぜ教えてくれなかったのかと実家の母さんと岩の親父にそれぞれ手紙を書くこと、別々に届いた返事には同じ言葉が書かれていた。

「大事な息子の命を守るものだから、手に入る最上級のものを贈りたかった。ただ、値段を言うのと使うのに躊躇ちゅうちよするだろうと思って、特に告げずにいた」

俺はこの親心を、非常にありがたいと思った。確かに白金貨を出さなければ買えないような武器だと知っていたら、余計な緊張で戦いに身が入らなかったかもしれない。あるいは、壊してはいけないと、使わなくなってしまうかもしれない。そういう妙に小心者な俺の性格を、両親は正確に把握していたのだろう。

今まで問題なく使っていた品だから、値段を知った後も特に気負わずに使うことができ。俺が最後まで生き残れたのは、この武器の力も大きかったと思う。

しかし、今世では、おそらく俺には魔法学院から入学通知が送られるはずだ。そうすると、俺は魔術師となるべくこの村を出ることになる。その場合、前世で愛用したその武器

を今世で手にすることはないのかもしれない。少し寂しいような気もしたが、仕方ないことだろう。

値段が値段だから、まさか強請る訳にもいかない。今世では諦めることにしよう。

翌日の早朝、親父が麗しの我が家に帰宅した。

帰宅しての一言目は、

「おう、元気だったか、ジョン、エミリー」

だった。豪快な笑みを浮かべながらそんなことを言う親父に、生まれてからの数年間で慣れたとはいえ、未だに涙が出てきそうになる。

幸せな日々だ。とてつもなく。

母がいて、父がこうして五体満足で家に帰ってくる。

それだけのことがこれほどまでに幸せだったのだと、どうして以前の俺は気付かなかつたのだろう。

きつと、平凡な日常が愛しいことは分かっている、それを涙が出るほどに幸せなことだと感じるには、人間の生活というのはあまりにも平坦なのだ。

全ての平凡が、日常が、奪われて初めて、俺はそれを理解した。

親父が帰ってくると、母さんは今までも増して料理に力を入れるようになった。

決して今までが適当だったという訳ではないが、これは恋する女の習性というものなのだろう。色々すつたもんだの末に一緒になった二人であるらしいが、あまりその経緯を語りたくないであろうことは雰囲気から察せられた。五歳の俺は年に不相応のエアーディングスキルを発揮し、深くまで探ろうとはしないため、たまに本人達が断片的にぼつぼつ語ることを組み合わせた知識があるだけだ。二人が結婚して何年経ったのかも正確には知らないが、俺が生まれたのだから少なくとも五年以上が過ぎていたのは間違いない。

そんな二人が未だに甘々な雰囲気で食事をしているのを見てみると、結婚とはいいいものなのだなという気がしてくる。前世においては縁のなかつた結婚だが、今世ではできるといいな。

「はい、あーん」

「お、おい、ジョンが見てるんだぞ……」

「別にいいじゃない。お母さんとお父さんが仲睦まじいのはいいことよね、ジョン?」

「あ、う、うん……そうだね」

とはいえ、二人が発するこんな空気を毎日味わうのは、なんとなく辛いものがある。

前世、幾度となく味わったこの気持ち。戦争前は勿論、戦争の最中でさえ、カッパルというものは至るところに跋扈し、俺のような独り身に厳しい精神攻撃を加えてきた。

心から祝福できたのは、俺の部隊の副隊長が、長らく友達以上恋人未満だった女魔術師と魔王城の直前でようやく付き合った時ぐらいだ。それ以外の時は常に恨みつらみでいっぱいであった。

今この場においても、発散したくてたまらない陰気なストレスが、俺の体内を漂っている。

「はい、あーん」

「お、おい……」

テーブルを挟んだ俺の対面で、隣に座る親父の口元に笑顔で匙を持つていく母さん。

幸せそうな二人を見てみると、まあ、仕方がないかため息が出た。

第3話 放り込まれた爆弾達

「よし、準備はいいか!」

朝食を終えた後、森の前で、親父はそう聞いた。

親父は、いつも仕事で纏っている王国軍支給のミスリル銀製の鎧を、皆に置いてきていた。

国を守るためにこそ身に着けるのを許されるものであって、それ以外の用途に使うべきではないからである。

というのは建前で、以前、金に困った兵士の一人が家に持ち帰り、そのまま売っぱらってしまったことがあったらしい。それ以来、自宅に持ち帰るのは禁止という規則ができたのだそうだ。

ミスリル銀は性能が高く、また稀少で価値も高い。そのため、これのできた装備は王国軍兵士の中でも特に危険な地域に赴任する者にもみ貸与される。

鎧を身に纏っていた兵士が辞職したり、退役した場合には、次に赴任する兵士に譲られる。大体そういう危険地帯の砦には錬金術師と鍛冶師がいるものなので、サイズ合わせもそれほど難しくないということだ。

親父が身に纏っているのは、帰宅する時に着てきた革製の軽鎧である。魔物の皮をよく鞣してあって、魔力を通せばその耐久性は一般の鉄鎧に勝るとも劣らない。

親父は約束通り、これから俺を狩りに連れて行ってくれるらしい。朝食をとってあまり時間も経っていないのに大丈夫なのかと聞けば、

「腹ごなしにちょうどいい」

と豪快に笑った。我が父ながら化け物のようである。

光があまり差し込まない森は暗く、恐ろしげな霧囲気を漂わせている。見上げると首が痛くなるほど高い木々が、天上より降り注ぐ成長の糧たる日光を、全て貪り尽くしているらしい。

ただ、そのお陰で地表には比較的背の低い樹木や貧弱な木々しか生えておらず、慣れずしまえば歩きやすい。そんな森林の中を、親父に連れられて歩いて行く。

「……アレンさん、魔物はまだですか」

そして、この探検にはもう一人、道連れがいた。

「おう、テッド。まだだな。出てきたら教えてやるから、それまでは森を注意深く見とけ」

「だけど……」

「お前を預かるに当たって求められたことはただ一つだ。お前に森を見せてやれ、と。まあ、グスタフ——お前の親父にもできることだが、あいつは狩りで忙しいから。ある程度実力がつくまで、お前は俺達と森歩きだ」

テッドは、今年で十歳になる。彼の父親であるグスタフは村一番の猟師と評判であり、一度森に入れば、まず手ぶらで帰ってくることはない。

そんな男の息子なら、父親に鍛えてもらうのが当然のような気もするが、グスタフにできるのは通常動物の狩りであって、魔物の狩りではない。彼ですら、魔物が出現したら逃

げるのである。そんな場に足手まといがいたら、彼の能力を以てしても、逃げられるかどうか分かったものではない。

だから、魔物がどれほどのものかという危険性を肌で覚えさせるために、グスタフはテッドのお守りを親父に頼んだのだ。

俺の親父は、強い。それはもう、強い。村の森に出てくる魔物など、鼻歌交じりで倒せるほどに強い。足手まといが一人二人いようと、被害を全く受けずに魔物を倒せるくらいに。

そんなことができる男は、村には親父しかいない。俺の誇りである。

だからこそ、グスタフは安心してテッドのお守りを親父に任せたのだ。

けれど、テッドには問題があった。それは何かといえば……

「テッド。狩りつてやっぱ難しいのか？」

俺がそう尋ねると、テッドは少し逡巡してから答えた。

「……父が言うには、気配を気取られないようにする技術を身につけるのが難しいらしい」

どこことなく、俺とは会話したくなさそうな雰囲気が出てくる。前世ではあんなにたくさん酒を酌み交わしたのに、実に寂しい反応である。

そう。このテッドこそが村のガキ大将であり、俺を避けて通る子供筆頭なのである。

三人で森を歩きながら、テッドは時々俺のことを気味の悪そうな目で見る。俺が彼を見つめ返そうとすると、ふいと視線を逸らす。

明らかに避けられていた。しかし興味がない訳ではないらしい。

誰も人間のいない森の中を長い間一緒に歩いていると、うまく言葉にはできないが、親近感のようなものが湧いてくる。

テッドも次第に俺に対する視線を隠そうとはしなくなり、たまに目が合うようになってきた。

まるで見世物小屋の檻にいる魔物と心を通じ合ったような、妙な感覚を覚えた。テッドにしてみれば、それこそこういう森や野原で思いがけず出会った魔物と、目が合ってしまったような気分かもしれない。自分には屈強な護衛がいて安全であり、危害が加えられることはないだろうと知ってはいるが、それでも大丈夫だろうかと不安になる、そんな表情をしていた。

そんな妙な空気を打開しようとしたのは、俺でもテッドでもなく、俺達を先導するただ一人の大人だった。そして、彼は三人のうち誰よりも豪快な男だった。

親父——アレンは俺とテッドを交互に見ながら、呟くように言った。

「お前等、お互いに気になってるのか？ 付き合いたいのか？」

男同士はやめとけよな、とまで言ったところで——

「おい！ やめてくれよ親父！」

「そいつは勘弁してくださいよ！ アレンさん！」

二つの非難が一齐に親父に向けられた。

気になってるというのは確かに正しいが、少なくとも俺もテッドもそちらの気はない。俺としては仲良くしたいのに間違いはなかったが、そういう目で見たことは一度もないのである。

もちろん、同性愛そのものは否定しないけれど、とにかく俺にはそっちの趣味がないということだけは親父に分かってもらわねばならなかった。

テッドも同様の気持ちだったらしく、憤慨というよりは焦りのこもった表情で親父に弁解している。事ここに至っては、俺達の普段の関係など問題ではなかった。共通の敵を前に、お互いの意思が無言のうちに通じ合っていた。

そんな俺とテッドに、親父は何でもないことのように話を続ける。あつげらかんとした、特に含むところのない、そんな声色で。

「なんだ、じゃあ、他に好きな女でもいるのか？ 俺は当然エミリーが好きな訳だが」

これは救いである。ここでははっきりと「いる」と言えば、親父の誤解は晴れる——なにを血迷ってかそんな結論に至った俺とテッドは、二人して同時に言い放っていた。

「いるに決まってるだろ！ 俺が好きなのは、カレンだ！ ……え？」

立ち読みサンプル はここまで